

研究報告

学生の理解度と特性からみた「わかる授業」の検討

—授業アンケート調査の結果から—

鍛 治 葉 子

Using Student Tendencies and Degree of Understanding to Make a Course More “Comprehensible”: From the Results of an In-class Survey

KAJI Yoko

Abstract : The purpose of this study is to focus on the ability to understand and tendencies of students and examine the methods used to conduct an “comprehensible course”. I conducted a written survey to Nursing Department students in their junior year who attended the course, “Methodology of Local Nursing Study II” and analyzed the responses by text mining. The questionnaire asked students to give their names and freely write their responses. Questions concerned : 1) opinions about the course, and 2) questions from the students. Documents distributed during the course were used as analytical data. The results showed : 1) Students are not necessarily well-educated about the issues presented in the course, even after completion, 2) it is necessary for students to have training to consolidate their already learned knowledge, 3) students tend to exhibit a weak understanding of abstract events, and 4) few students step deeper into the content of coursework that they have difficulty understanding. Based on these results, the author found it necessary to construct a course program that allows students to acquire appropriate nursing knowledge and techniques.

Key Words : Ability to understand, tendencies, comprehensible course, written survey

抄録 : 本研究の目的は、学生の理解度や特性に着目し、「わかる授業」を進めていくための方法を検討することである。地域看護学方法論Ⅱの授業に出席した本学看護学科3年次学生を対象にアンケート調査を行い、テキストマイニングにより分析を行った。アンケート調査は、自由記載・記名式とし、調査項目は①授業に対する学生の感想、②学生からの質問であった。さらに、授業の配布資料も分析データとした。その結果①学生は、すでに講義が終了していることに対しても確実に知識を身につけているとは限らないこと、②学生には、すでに習得している知識を統合させる訓練が必要なこと、③学生は抽象的な事象に関する理解が弱い傾向があること、④学生は、自分が理解困難な授業内容にまでは踏み込む姿勢が少ないことが明らかとなった。学生に、看護に対する適切な知識・技術を身につけさせていくため、これらの結果を基として授業プログラムを検討していくことの必要性がわかった。

キーワード : 理解度, 特性, わかる授業, アンケート調査

I. はじめに

大学とは「学術の中心として、広く知識を授け、深

く専門の学芸を教授・研究するための学校（大辞林第二版）」である。

広く知識を授けるための基本は、授業ということになるだろう。宇佐美が著書『授業研究の病理』の中で

述べている通り「授業とは「何か」を知らしめるものであり、知らしめるためには「わかる」授業でなければならない。

近年、多くの大学が「授業評価」として、授業の最終日に学生からのアンケートをとっている。そのアンケート結果を基に、教員は授業内容を工夫するという、一見非常に好ましいシステムが確立されている。

ところで、「わかる授業」とはどのようなものを指すのであろうか。単純に考えれば、レベルさえ下げれば授業は「わかる」。しかし、それで良いのだろうか。

授業評価に関しても、学生の意見が反映される一助になるという意味では非常に意義があるが、一方で宇佐美が主張するように「学生を甘やかしていることであり、有害である」とする意見もある。授業評価はどこまで価値があり、どこまでの信頼を置けばよいのか。

看護は実践の学問であり、良い看護を提供できる実力を身につけなければならない。その基礎となるのは、看護に関する適切な知識や技術であり、学生にとってわかりやすい授業を行なうことは、基礎を作る上で、必要なことである。

今回、地域看護学方法論Ⅱでの結核に関する授業へのアンケートから、学生の「知識」「理解」に対する特徴と、授業に対する学生の感想を分析し、「わかる授業」をすすめていくための方法を検討した。

Ⅱ. 調査方法

1. 調査対象

平成21年4月13日、及び同月20日に行われた地域看護学方法論Ⅱの授業に出席した本校看護学科3年生82名の学生を対象とした。学生全員に、2回の授業を通じての疑問点や感想を記載したアンケートをとった。

2. データ収集方法

《アンケート項目》

今回の調査では、研究者が作成したアンケート用紙を測定用具として用いた。アンケートは自由記載、記名式とし、質問項目は①授業に対する学生の感想、②学生からの質問内容として設計した。

《分析に使用したデータ》

分析に使用したデータは以下の通りである。

1. 学生に対するアンケート調査より
 - ①授業に対する学生の感想（自由記載）
 - ②学生からの質問内容（自由記載）
2. 授業の配布資料（パワーポイントでの作成資料）
授業に使用されたパワーポイント資料のタイトル部分を抽出し、講義内容の大枠を捉えた。

（授業内容は、下記に説明するテキストマイニングに必要な項目である。）

《データ収集方法》

2回の授業終了後に、各学生にアンケート調査を行い、4月27日に回収した。感想・質問ともに「特になし」という学生は、空欄で提出した。アンケートが回収できた学生は80名（97.6%）であった。

3. 分析方法

テキストマイニングツールである、Text Mining Studio 3 ver 3.1を用い分析を行なった。テキストマイニングは、アンケートやインターネット上の掲示板のように、非定型に記載された文章を単語やフレーズに分割し、それらの出現頻度や相関関係を分析することで、有用な情報を導き出すシステムである。フリーソフトも含め、多くのソフトが開発されており、今回使用したText Mining Studio 3 ver 3.1は、株式会社・数理システムにより開発されたシステムである。

このText Mining Studio 3 ver 3.1を使用することで、「単語頻度解析」「ことばネットワーク」「注目語情報」「評判抽出」「対応バブル分析」が可能となる。

「単語頻度解析」は、テキストの中で使用頻度の高い単語を抽出するものである。使用頻度が高いということは、話題に上る機会の多さ・関心の高さを意味するものである。

「ことばネットワーク」は、話題分析とも言えるもので、共起（同時出現）していることが多い単語同士を矢印で結び合わせることで、単語がどのような話題場面で使用されているかを分析できるものである。各単語の横には円が記され、その円の大きさが大きいほど、その単語の使用頻度は高い。つまり大きな円の横にある単語を中心とした話題が、そのテキストの主な話題となっていることが示される。

「注目語情報」は、ある特定の単語に注目し、どういった使われ方をしているのか、また他のどういった単語と共起しているかを、共起する単語同士を矢印で結ぶことで表すものである。矢印の太さが太いほど、深いつながりがあるといえる。

「評判抽出」は、良いイメージ（ポジティブな評

価)の単語、悪いイメージ(ネガティブな評価)の単語を抽出することで、そのテキストに高評価・低評価のどちらの記載が多いのかを分析する。

「対応バブル分析」は、単語同士の関係や、単語と属性の関係を2次元(もしくは3次元)上にマッピングするものである。項目のバブルの大きさは、そのデータ量の大きさを表し、単語のバブルの大きさは、その使用頻度の高さを表す。さらに、単語と項目との関連性も表すことができ、ある項目のバブルの近くに位置する単語ほど、その項目に特徴的にみられるということがわかる。

なお、特に気になった単語や表現に関しては、原文一致機能を用いて、基データを確認することも可能である。

以上のソフトを用いて、以下のデータを分析した。

1 学生に対するアンケート調査より

①授業に対する学生の感想

②学生からの質問内容

2 授業の配布資料

4. 研究倫理

なお、本研究に関しては、その目的・内容を学生に説明し、アンケート内容を使用することに対しては学生より同意を得ている(倫理委員会提出予定)。

III. 結 果

1. 講義内容に関して

講義内容に関する結果を述べる前に、本学における看護教育のカリキュラムを確認しておく。本学看護学科におけるカリキュラムは、表1に示した通り、地域看護学方法論IIの履修以前に、地域看護学関連では、「地域看護学概論」「地域看護学方法論I」の講義が終了している。つまりここまで、地域看護に関する大

表1 甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 看護教育カリキュラム

時期	専門科目		専門基礎科目
1年次	看護学概論 基礎看護援助論I	基礎看護学実習	リハビリテーション概論 医療コミュニケーション 解剖生理学I, II 健康と社会
2年次	地域看護学概論 地域看護学方法論I 基礎看護援助論II, III 老年看護学概論 在宅看護学概論 在宅看護学方法論I 成人看護学概論 精神保健概論 母性看護学概論 小児看護学概論 フィジカルアセスメント 基礎助産学 学校保健	基礎看護学実習II 在宅看護学実習I	疾病治療論I, II, III 病理学 栄養学 保健情報学 薬理学 疫学 医療遺伝学
3年次	地域看護学方法論II 老年看護学方法論 在宅看護学方法論II 成人看護学方法論I, II 精神看護学方法論 母性看護学方法論 小児看護学方法論 研究方法論 看護管理学 助産診断技術学I 養護学概論 健康相談活動論	老年看護学実習 成人看護学実習I, II 精神看護学実習 母性看護学実習 小児看護学実習	医療リスクマネジメント論 医療倫理
4年次	地域看護学方法論III 助産診断技術学II 助産管理	在宅看護学実習II 地域看護学実習 助産実習 総合実習	

*太字は、地域看護学関連科目及び実習

*下線は、地域看護学方法論II履修以前に、感染症(結核)を取り扱っている講義

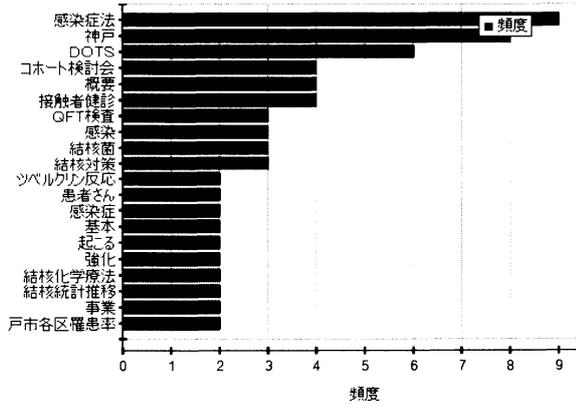


図1 講義内容における単語頻度解析

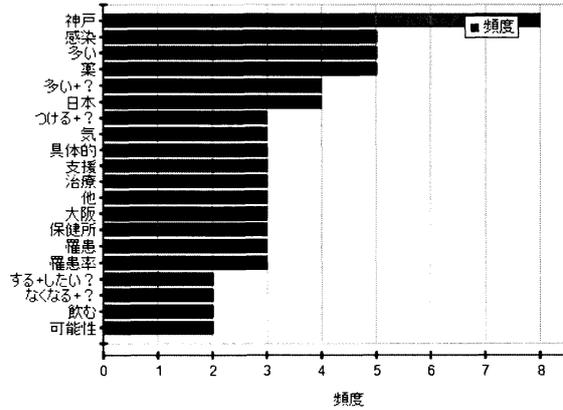


図3 学生からの質問における単語頻度解析

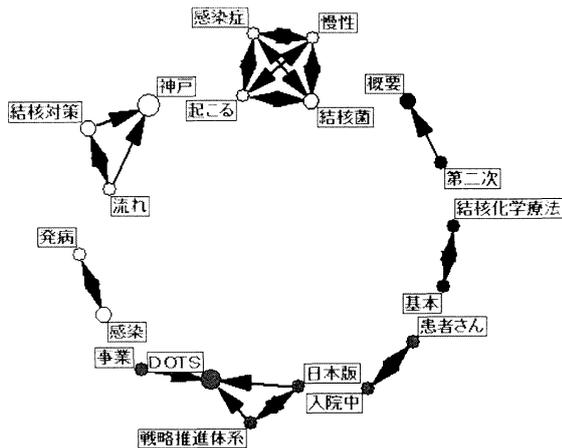


図2 講義内容におけることばネットワーク分析

枠は学習されているということである。また「疾病治療論Ⅰ」「病理学」「疫学」では、感染症の中の一疾患として、結核についての講義が行なわれており、抗結核薬については「薬理学」の中でも講義がなされている。方法論を中心とした、看護学に関しての具体的な学びは3年次からであるが、疾患の病態や治療・統計データなど基礎的な講義は既に終了している状況である。

地域看護学方法論Ⅱは、それら講義で習得した知識を基礎として行われる講義であり、結核に関する今回の講義では、「感染症保健活動」として、患者管理としての家庭訪問等や、集団発生とその予防について学ぶことを目的としている。

「感染症法」「神戸」「DOTS」「コホート検討会」「接触者健診」といった単語が、講義内容に対する単語頻度解析で上位を占めている(図1)。「DOTS」「コホート検討会」「接触者健診」は、「感染症法」で規定されている内容であり、これらはすべて、患者管理や集団発生予防の法的根拠、実際の結核対策に関わるものである。

さらに具体的な講義内容を見るために、ことばネットワーク分析を行なった。それによると、「神戸市の結核対策」「DOTS事業」についての内容が多く、その他「結核は結核菌により起こる慢性感染症であること」「感染と発病」「基本となる結核化学療法」「入院患者」などが講義されていることがわかった(図2)。

2. 学生からの質問に関して

学生80名中、質問を記載していた学生は31名(38.8%)、質問数は55であった。

質問において多く用いられている単語は、「神戸」「感染」「多い」「薬」であり、特に「神戸」という単語が多く用いられている(図3)。

そこで、具体的にはどのような質問内容なのか、ことばネットワークを用いて分析を行なった。単語の使用頻度の高さは、その単語の横の円の大きさで表わされており、「神戸」「感染」「薬」の円が大きいことは、上記と一致している。内容を見ると「神戸(や大阪)の結核罹患率が高いのはなぜか」「感染がわかった場合の保健所の具体的な対応方法や、(他所との)連携」「副作用など薬に関すること」が多く質問されている。「区間(神戸市の各区間を指す)の情報交換」も、「連携」という意味では「感染がわかった場合の保健所の具体的な対応方法や、(他所との)連携」に類似したものである。その他では、「どうしたらよいのか」「気をつけたらよいのか」など、学生が何か状況を想定して、それに対する具体的な対応方法を質問しているものも見られている(図4)。

3. 感想に関して

学生80名のうち、感想を記載していた学生は66名(82.5%)であった。

単語頻度分析(図5)では「知る」という言葉が圧

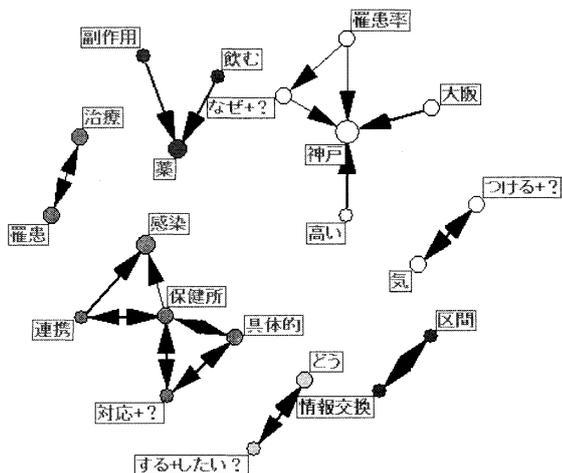


図4 学生からの質問におけることばネットワーク分析

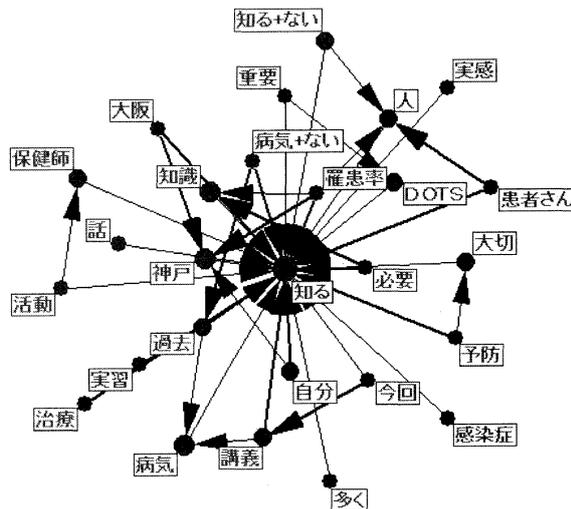


図6 学生の感想における注目語情報分析（「知る」「知識」に注目した場合）

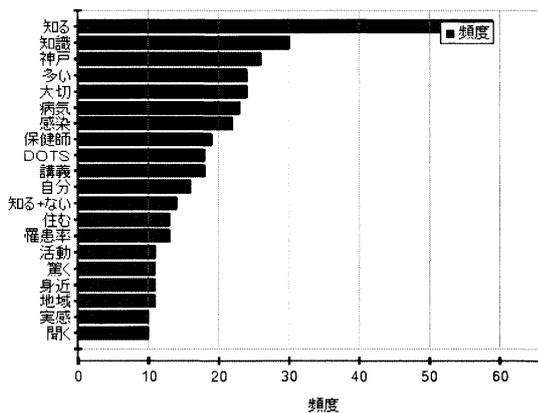


図5 学生の感想における単語頻度分析

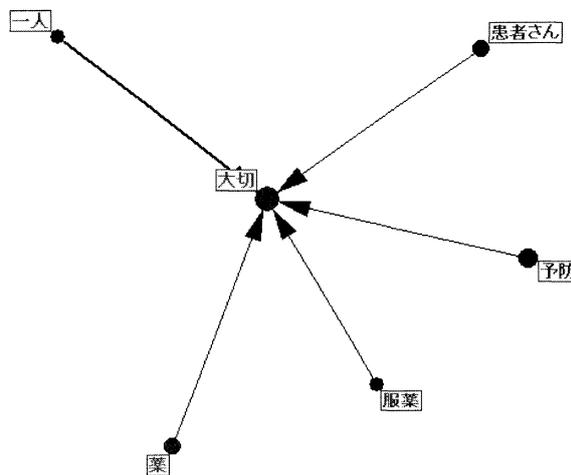


図7 学生の感想における注目語情報分析（「大切」に注目した場合）

倒的に多く、次いで「知識」が多い。これは何かを「知りえた」「知識を得た」と感じている学生が多いということである。では、何について知った・知識を得たと感じているのかを明らかにするため、注目語情報分析で「知る」「知識」に、共起する単語を抽出した(図6)。多くの単語が表れていることから、学生の学びは様々であったことがわかる。特に共起している割合が高い単語は、太い矢印で表示されており、そこに注目すると「神戸や大阪の結核罹患率」「予防が大切であること」「結核患者さんについて」「結核治療について」「結核は過去の病気ではないこと」を知った学生が多いといえる。

この他、単語頻度分析では「大切」「知る+ない(知らない)」「驚く」という単語がみられる。これらの単語は、学生の理解度を測る上で有用であると考えたため、それら3語について注目語情報あるいは原文一致を用いて確認した。

まず、学生は何を「大切」と理解したのか。注目語情報でみると、「患者一人一人への関わり」「服薬」

「予防」が大切であると理解していることがわかった(図7)。

次に原文一致を用いて、学生が「知らない・知らなかった」ことをみると「治療方法や感染経路、結核について全体的に」「接触者健診の範囲」を知らなかったというものであり、「日本(先進国)で結核が流行していること」や「神戸における結核罹患率の高さ」「経済的理由で治療を受けられない人がいること」「治療中断者がいること」など、罹患率の高さや患者の現状に対し、驚きを感じていたことがわかった。

では、全体を通じ学生は、今回の講義に対しどのような感想をもったのだろうか。評判抽出により、良いイメージで語られている単語・悪いイメージで語られている単語を比較した(図8)。全体として「ポジティブ」に語られている単語が多く、「知る」「知識」

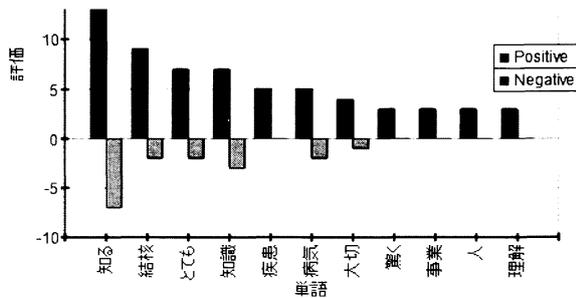


図8 学生の感想における評判抽出

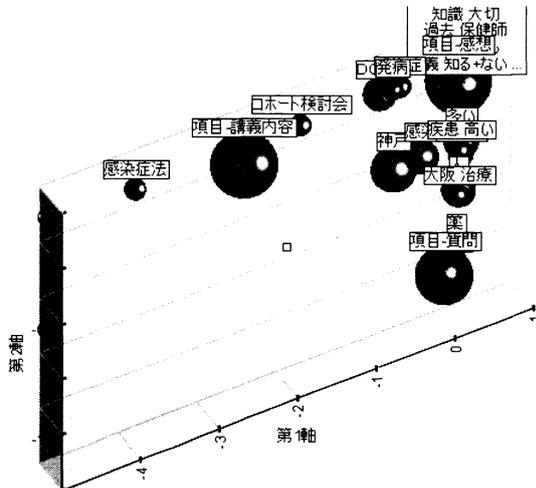


図9 講義内容・質問・感想における対応バブル分析

「理解」など、“わかった”ことを良いイメージとして語っている学生が多い。その他の単語も、ポジティブな表現をされているものが多かった。

4. 講義内容、質問、感想の比較・関連に関して

講義内容・質問・感想の関連性を比較するため、対応バブル分析(図9)を行なった。

講義内容と感想に共通する単語を見ると、「DOTS」「発症」「感染症」「コホート検討会」があり、その中では「DOTS」の使用頻度が高い。講義内容と質問に共通する単語では「神戸」の使用頻度が高い。

図全体を見ると、質問と感想の間には多くの単語が見られており、共通した単語が使用されていることがわかる。一方、講義内容と質問・講義内容と感想の間には共通する単語が少なく、講義内容と質問・感想の3項目に共通する単語は「神戸」「感染」程度しかない。

講義内容に特徴的に見られる単語には、「感染症法」「コホート検討会」があり、特に今回の講義のポイントであった「感染症法」は講義内容以外では使用されていない。

IV. 考 察

1. 講義内容に関して

講義内容において、最も多く使用されている単語は「感染症法」である。法律による施策内容として「神戸市の結核対策」「DOTS事業(感染症法第五十三条の十四 保健所長は、結核登録票に登録されている者について、結核の予防又は医療上必要があると認めるときは、保健師又はその他の職員をして、その者の家庭を訪問させ、処方された薬剤を確実に服用することその他必要な指導を行わせるものとする。)」接触者健診などを、講義されている。「結核は結核菌によりおこる慢性感染症であること」「感染と発症」「基本となる結核化学療法」など、結核に関する基礎的な内容についても触れられているが、あくまでも「感染症法」を説明する上での前提として話されている程度である。

それはカリキュラムからみて、「結核の病態・治療方法・統計データ・薬剤など、基礎知識を踏まえた上での講義である」という前提条件から妥当な内容であると言える。

2. 学生からの質問に関して

学生80名中、31名(38.8%)が質問事項を記載しており、講義に対する自らの疑問を表出できる、積極的な学習態度である、ということは高評価できるのではないだろうか。

では質問内容はどうだろうか。最多である「神戸の結核罹患率が高いのはなぜか」という内容に注目してみたい。この解答は、①結核はかつて死亡原因1位の疾患であったという歴史的背景、②当時感染した人が高齢になり、発病しているケースもある、③社会階層や職業階層など、格差が広がり、結核の早期発見や治療継続が困難な者も少なくないという社会背景、④結核は飛沫核感染であり、予防が困難であるという疾患の特徴を総合して導き出さねばならない。これらは、既に学生が学んできた内容であり、今回の講義は、「学生は、それらの知識を理解・総合した考察ができる」という前提に立ってなされるものである。しかし、それらが理解・考察できない学生が「感染症法」の講義を受け、どこまで理解できたのだろうか。

その他、「DOTS事業」に関連して、薬剤に関する質問も多いが、「抗結核薬にはどのような薬があるか」「服薬を継続させていても耐性菌が現れないの

か」など、なぜ確実な服薬管理を行わなければならないのかという、DOTSの根幹をなす部分が理解できていないことを窺わせる内容である。

では今回の講義内容の主たる内容である「感染症法」と関連の深い質問はなされているのか。質問事項を確認すると、「結核患者が発生した場合の保健所・その他との連携はどうしているか」2件、「神戸市の区間での情報交換の場はあるのか」1件（感染症法第53条の10 結核患者の届出の通知、同法第53条の11 病院管理者の届出など）「抗結核薬は高価なのか」1件（同法 第37条の2 結核患者の医療）が該当する。質問した学生自身、それらの内容が感染症法に関連していると知らなかった可能性もあるが、社会的・法的な関わりを必要とする部分にも目を向けられたという点で評価できるのではないだろうか。これらの質問を通して、社会的な背景・法的裏づけと関連させながら解答していけば、効果的な学習がなされるのではないか。

漠然とした内容では「どうしたらよいのか」「気をつけたらよいのか」という質問が各3件みられる。具体的には、「結核の知識を多くの人に広めるにはどうすればよいか」「患者指導はどうすればよいか」「結核の早期発見はどうすればよいか」「結核を発病させないために気をつけることは何か」「患者とのコミュニケーションで気をつけることは何か」という内容であった。いずれも多角的な面からの配慮・関わりが求められるものであり、知識を総合し考察していかなければならないものである。特に「患者指導」「患者とのコミュニケーション」は、医療職が対人サービス業である以上、相手の性格・背景・個性を考えて対応していくべきところである。まずは自らが実践し、その中で体得していくしかない部分でもあり、他者から一言で教示されるべきものではない。

このように、講義内容を習得するだけのレディネスが学生に備わっておらず、その結果、質問内容と講義内容が乖離傾向にあること、学生は自ら知識を総合させ考えていく姿勢が少なく、マニュアル的な解決方法を求めることが問題であると考えられる。

一方で、社会的・法的な問題にも目を向ける姿勢が築かれつつあり、そのような学生の姿勢を評価した上で、ともに解答を導き出していくことが必要であろう。

3. 感想に関して

感想の内容をまとめてみると、以下のように言える

のではないだろうか。

学生は、講義を受ける前には結核について全体的な知識が不足していたが、講義を受け①結核は過去の病気ではなく、神戸や大阪では今なお高い罹患率をみていることや、②結核の病態や治療、患者への関わり方を知った。その中で、①日本、地元神戸の罹患率の高さ、②患者がおかれている状況に驚き、①患者一人一人に対応していくこと、②服薬を継続させていくこと、③予防対策を講じることの大切さが認識できたということになる。

新たな知識を得たことを学生は肯定的な言葉で表現しており、今回の授業が高評価であったと言える。兵庫県下で現役の保健師として活躍している講師から、結核に関する最新のデータ・現場で必要とされている知識を学ぶことができたことは、学生にとってやはり有効なものであった。

ただ、今回学生が「知識を得た」と感じている内容は、これまでの講義の中で既に学んでおくべきものである。それらの知識を基礎として、法的背景・実際に神戸市で行なわれている施策や取り組みについて学ぶのが、今回の講義の目的であった。そう考えると、確かに知識量は増えたにしても、「今回の講義で学ぶべき内容」については、どこまで理解できたと感じているのか疑問である。

4. 講義内容、質問、感想の比較・関連に関して

本来は、「講義内容」に添って「質問」がなされ、「感想」を持つのが授業のかたちであろう。しかし上記までの考察、および対応バブル分析をみると、その本来のかたちとは違っているように考えられる。

質問と感想には、共通した単語が多く用いられているのは、同一の母集団が記載したアンケートであることから当然の結果と言えよう。しかし、一番中心であるべきはずの講義内容と共通する単語の少なさは、上記の考察と同様、講義内容と質問・感想の乖離傾向が現れているということであろう。

特に講義内容にのみ使用されている単語として、「感染症法」「コホート検討会」がみられることに注目したい。

感染症法に限らず、法律は条文を理解する・具体的な事例や施策とつなぐことにより理解しうるものであると考え、地域看護学実習が始まっておらず、具体的な場面を見学した経験さえない学生にとって「法律」は、あまりに抽象的で理解が困難だったのかもしれない。同様に、コホート検討会についても、どのよ

うな症例について、どんな職種が集まり、どのようなことが話し合わせ、どのような方針が出されるのか、非常にイメージしにくいものである。そのため、学生の印象に残りにくく、質問や感想に挙がってこなかったのではないだろうか。

感染症法の具体的な施策として「DOTS」も、学生にとって未経験であることは変わらないが、「患者一人一人に対する服薬確認」は、学生にもイメージしやすいものであり、感想として現れやすかったのではないだろうか。

このような状況の中でも、学生は「知識を得た」と感じており、講義に対し高評価な言葉を述べている。それはどのように考えれば良いのだろうか。

今回のアンケートは、講師にその結果を伝えるものであり、出欠確認も兼ねることから記名式のものであった。そのため、否定的な意見や感想は記載しにくかったということも考慮すべきことであろう。

それを考慮した上で考えなければならないことは、講義内容と質問・感想では使用されている単語が乖離しているが、質問と感想では、使用されている単語が共通しているということである。講義に対するアンケートの記載を求められた学生は、「自分が理解できた範囲の」講義内容に対し、質問・感想を記載しているに過ぎないということである。教員が「強調したい」「重要である」と考えていても、学生にそれが理解できない、或いはイメージさえできない場合には、あえてその内容にまで踏み込もうとしない傾向が見られる。

学生から「理解できた」「わかった」という言葉が得られると、教員側としては安心する。しかし、本当に理解できたのか確認しなければならないということである。そのためには、授業の間での小テストも有効な手段であろう。

それでも、自分が理解できそうにないと感じたことには踏み込もうとしない学生に対しては、どのように関われば良いのだろうか。中学生と大学生の違いはあるが、『基礎学力を問う-21世紀日本の教育への展望-』（東京大学 学校教育高度化センター編）において、ある中学校を対象に、学生の「成績」「理解の度合い」と関連しているものは何かを分析した結果が明らかにされている。それによると、「ノートをとる」「人の話を聞く」者は、理解度が高い傾向にある。ただ教員が言った言葉をそのまま書き写すのではなく、自分の言葉で大事なことを書き加える・要点を取り出し下線を引く・メモをとる・自分の考えや疑問を書き出

す・講義内容を自分なりに整理するなどが、関連しているということである。さらに、他者の意見を聞き、自分の意見と比べることで学びが深まるということも述べられている³⁾。

大学生に対し、ノートの確認を行なうことは現実的ではないだろうが、重要な項目については学生にグループで調べ発表させる、というのは非常に有効な手段なのではないだろうか。

V. おわりに

今回のアンケートを分析し、明らかになったことは以下の通りである。

①学生は、講義が終了していても、確実に知識を身につけているとは限らない。

したがって講義の際には、既に学んでいる内容についても知識を確認してから、新たな知識を伝えることが必要である。

②単に知識を身につけさせるだけでなく、それらを統合させ考察していけるための訓練が必要である。

学生は、知識を組み合わせ、考察しなければ解決できないものや、個別性の高い事項についてさえ、他者(教員など)からのマニュアル的解答を期待する傾向にある。教員がすぐに解答を与えるのではなく、解答を導き出すための基礎となる知識は何か、それら知識を組み立て考察するにはどうすれば良いのかを意識的に訓練させていく必要がある。

③学生は、抽象的な事象に関しては理解しにくい傾向がある。

抽象的な事象については、実際の活動方法や対応など具体例を挙げる・実習時に講義内容を振り返りながらつなげていくことが有効であろう。

④学生は、自分が理解可能であったことを中心に講義への質問や感想を述べる傾向があり、教員の意図とは必ずしも一致しない。また、自分が理解できないことに関しては、踏み込む姿勢が少ない。

小テスト・グループ学習や発表などで、理解度を確認すること、他者の意見を聞く中で理解を深めていくことが必要である。

また授業評価においても、「授業科目」や「担当教員」に関する眼を持たせるだけでなく、「学生自身の学習態度」として、予習復習に費やした時間・自ら考察する姿勢を持てたか・理解困難な講義内容へも熱心に取り組めたかなど、自分自身を振り返らせる眼も育てていく必要があるだろう。

学生が、適切な知識・技術をもって実践に活かせる
こそ、よりよい看護が提供できるのである。

したがって土台となる適切な知識・技術を、学生が
身につけられるよう、「わかる授業」の実践のための
プログラム作成等、今後検討しく予定である。

文 献

- 1) 宇佐美寛：授業研究の病理，東信堂，2005. P 127-143
- 2) 宇佐美寛：大学の授業，東信堂，1999. P 172
- 3) 東京大学 学校教育高度化センター編：基礎学力を問う－21世紀日本の教育への展望－，東京大学出版会，2009. P 224-225